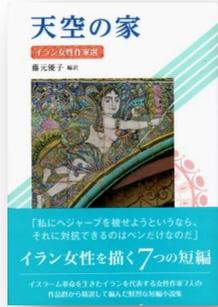


ペルシアの天使は腕時計をしていた

吉田美和子



イラン女性作家選 藤元優子 編訳
段々社 2000円 2014年5月刊

『天空の家』
という現代イ
ラン女性作家
7人の短編小
説を紹介した
書籍が送られ
てきた。イラ

ンの文学とえばペルシア時代の『ルバイヤート』し
知らない我々だ。あれは日本なら『万葉集』『古今和歌集』
みたいな古典詩である。詩の豊饒の国イランの、現代詩
は私も少しばかり読んだが散文の作品はほとんど知らない。
ましてや現代女性作家の作品が日本語に翻訳される
のは、これが初めてだというから、それも驚きである。

イラン映画などはずいぶん早くから紹介され名の知られた女性監督だっているのだが。訳者は大阪大学教授藤元優子氏。学生時代、イラン留学中に革命に遭遇したこと
で現代文学研究を始めることになったという。これまた
私たちには「謎のイラン革命」……なのだ。

イラン・イスラム革命は1979年だからそんなに昔
のことではない。日本では全共闘時代も昔語りになって、
山口百恵が「いい日旅立ち」なんかを歌っていた年だ。
シーア派宗教指導者ホメイニ師をいただいて大衆が蜂起
レザー・シャー（パーレビ国王）を追いだしたこのイス
ラム革命は、たぶん世界史に稀なる「反動」の革命なの
だろう。アメリカ傀儡政権であつたらしいシャーの「上
からの」近代化路線にNOというときの反米民主化運動
は、運動内部で一瞬の権力奪取に後れを取った左派知識
人たちにたちまちに襲いかかる宗教ファシズムとなった
ものだろうか。

弾圧粛清に消えていった人たち。国内に残って沈黙の
闘いを続けるか、中にいて新しい光明を見出してゆくか、
国外に脱出、亡命するか……。文学もまた、その揺れ動

きの30年を経て来たわけである。

イランの女たちはしなやかで強い

7人の短編のうち、とくに面白かったのは表題作『天空の家』の重鎮、ゴリー・タラッキー(1939～)と『アトラス』の若手シーヴァー・アラストウイー(1962～)であった。私が惚れ惚れとしてしまったのは、見よ、この堂々たる面構え、彼女たちの風貌の見事さである。

タラッキーは16歳で渡米、哲学専攻。帰国して政府



ゴリー・タラッキー

という意味なのだそうだ。各国語に翻訳されて知られた作家らしい。受賞多数。

アラストウイーは対照的な経歴である。革命後に8年も続いた対イラク戦争で看護活動に従事したというか

機関勤務・テヘラ

ン大学教授。革命

後はパリ在住とい

う、典型的な進歩

派知識人のありよ

うだろう。タラッ

キーとは「進歩」



シーヴァー・アラストウイー

受賞しているが、検閲で発表できないこともあるようだ。この小説『アトラス』が昨年やつと雑誌に載ったというのは、大統領がアフマディネジャドからロウハニーに代わったことと関係があるのか。

人間としては揺るがない強さを感じさせる彼女たちの書く作品世界は、つつましく可憐だ。短編ではあり発表という場も計算されているからか、声高には語らない。批評性は注意深く隠されており、微笑みの中に深く悲惨は暗示される。これは優れたたたかな構造である。

『天空の家』は、まるで小津安二郎の『東京物語』だ。子どもたちのどの家にも居場所のない老婦人の孤独の物語である。

らまだ10代だったかも知れない。詩人、災害活動ボランティア、女優、ボデイビルディングのコーチ！ 不屈の野戦派の匂いがする。国内の最高賞も

革命の混乱の中、息子は何国を出るといふ。「マズワードは戦争にはうんざりで、死ぬのが怖かった。」彼女・マヒーン夫人はテヘランの家から動きたくはなかったのだけれど、「問いも抗議も存在の主張もせずに」先祖伝来の絨毯の模様を撫でていた。先行する息子が準備を整えるまで妹の家に預けられ、やがてパリの息子一家のアパートに合流し、ロンドンで暮らす娘夫婦に呼ばれて移動し、夫人が粗略に扱われていると怒ったカナダ在住の兄が航空券を送りつけてきたのでカナダへ向かい……、老婦人に居場所は見つからない。

表題の「天空の家」とは、航空機の座席のことである。これはおもしろい着想だ。たしかに狭苦しいけれどすっぽりと身を包んでそこに居続ける権利を保障してくれるいつときの我家、放心と夢想の場所であるにはちがいない。彼女は移動する国際線の航空機の中にしか、自分に許された場所を持ち得なかつた。

マヒーン夫人はテヘラン時代のような大邸宅の暮らしは無理だと理解しているのである。子どもたちを愛していたし物わがりのいい母親であつた。けれども来てみれば

自分が孫の部屋を占領していることに仰天し、身も世もないのである。だからカナダへの長旅を彼女は喜んだ。「足下には明るく、軽く、清らかな天国の夢、天使たちの気楽な夢のような白い雲があつた。」

この物語の不思議な美しさは、悲惨を語らないことである。たとえば息子と娘の「事情」の板挟みで行き場を失つたとき、彼女は地面に穴があいて自分を呑みこんでくれないかしらと地面を足でつついてみたりする。夢見る少女がそのまま老齢になつたような描き方は、どこどこに少女時代の回想を交錯させることで、窓越しの木漏れ陽を散らしたような甘美な香気を持つ。

しかし上機嫌で航空機に搭乗しても、もはや彼女は高熱を発し、機内食も食べられない。別人のようにやつれた老いたる妹を空港に迎えた老いたる兄は、再会して初めて異郷での長かつた自分自身の孤独を意識する。兄は看病の枕元で「健康が回復したらふたりで国に帰ろう」とささやくが、もう彼女は天空の目映いイリュージョンの中へと独り駆け上つてゆくのである。

「声高には語らない」と先ほど書いたが、この柔らか

な抑制、ほんのりしたユーモアに驚かされる。絶叫したいことは山ほどあるだろうに、なんと賢く強い人たちだろう。それはアラストウイーについても当てはまる。

『アトラス』は梗概の紹介しにくい小説だ、『天空の家』が老婦人のメルヘンなら『アトラス』は若い女のホラーか。イギリスの小説『レベッカ』は結婚してある大邸宅に暮らすことになった女性が死んだ前妻レベッカの影に追いつめられてゆく恐怖小説だったが、アトラスも謎の館に嫁に來た。結婚したとき、夫のルーズベはこう言ったのだ。

「ここに住む限り、一階から聞こえてくる声のことは何も尋ねないで欲しいんだ、叫び、うめき、遠吠え、怒鳴り声、牛の鳴き声……、ともかくどんな声が聞こえてもだよ！」

こんな条件下でおとなしく暮らすのは至難のことだが、アトラスは一度だつて尋ねたりはしなかった。二人の子どもには「声」のことは口外しないよう躑躅してある。夫も優しく、仲良く「二階の一室で」暮らしている。狭い

から食堂は屋上だ。上流富裕階層の『天空の家』とは異なり、イランの下層庶民の暮らしを想定しているようだ。中庭があるのが中東の家の造りだから、二階からは中庭の菜園や実をつけたサクラランボの樹が眺めおろされる。『レベッカ』の大邸宅の暗闇がやたらに怖かったのに比べると、この小説の舞台は貧しいながらに爽やかな風の吹き抜けるような、明るい光の差す空間ではあるのだ。不安は消えなくても。誰もあえて秘密をこじあけたりさえしなれば。

アトラスの叔父が突然訪ねてくる。ぎこちない供応から事態の破裂へ。「我々には娘をどんな種族に嫁にやつたか知る権利がないということかな？」

この先は書いてしまえばネタバレだが、一階に住むのはルーズベの両親と八つ子のこどもたちであった。声や物音としてしか登場せず姿は描写されないが、獣のような怪異な存在である。日本にも、奥座敷に座敷わらしがいたり古家に妖怪が棲みついたり、不具に生まれた娘を憚つて座敷牢に閉じ込めた実話などもあった。そうした子どもは靈力をもつた特別な存在であることもあった。

しかしここでは彼らが何の暗喩かは明かされない。怪獣ゴジラほどの性格付けもないのである。不条理。謎という現実を前にしたときの「見てはいけない・知ってはいけない」という禁忌こそがここではテーマなのだ。

「尋ねるのは罪じゃないんだよ、お前！ 目を覚ますんだ！」と叔父。「避けるべきなんだ、アトラスィー。真実は避けるべきだ、人間は真実を目にするべきじゃないんだよ」と夫。——こう書き出してみれば作家の意図は明白だが、短編らしい一気呵成の展開に翻弄されて、読んでいるときはほとんど気付かない。むしろ、大丈夫かしら、障害者差別などと言われなからしらなどと余計なことにそわそわしながら、怪奇漫画のような幻想性に振り回される。なかなかの手腕と言っべきだ。

「あいつらを目にしてから、日に日に背が縮んでいきました」と、小人症のように描かれる隣の部屋の住人（従姉妹？）、優しいシャムスイー。この事件のあと、眠ってしまってもう覚めることのない、寝たまま成長してゆく子どもたち。叔父は眠れなくなつて館に棲みつき、1階の両親に手伝って中庭のサク

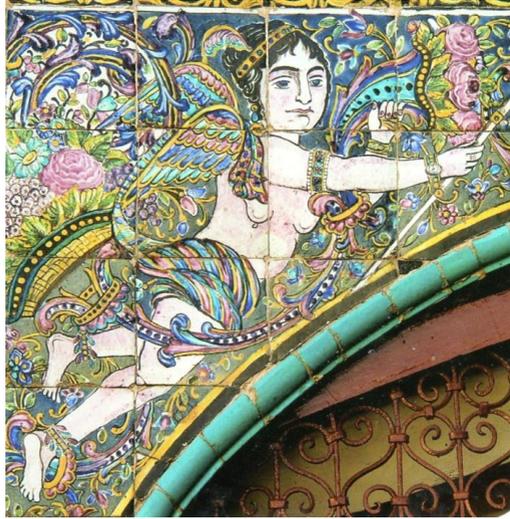
ランボの世話などしている。「アトラスはルーズベの古い本を熟読して、楽しい、とても楽しいと信じ込んでいた」そして、アトラスの背が縮み始めるのである。視力も落ちて来た。ぞっとした。いま引用のためにこの個所を見れば、この文章の続きには「毎晩、救急車が彼らの家の傍らを通り過ぎ、けたたましくサイレンを鳴らした」という一文が仕込まれている。物語はこの館から一歩も外に出ていないから、唯一、外界の空気——社会情勢と言っておこうか——が描かれる個所である。お見事。

web に書評でも載っていないかと検索したら、本にあるのとは違う作者の肖像写真を見つけてしまった。おや、今度はマウンテンバイクのインストラクター？ 艶然と



微笑む彼女はお約束の黒いヴェールを被っている。強靱とこそ言うべきか。闘う女のイメージが際立つ写真だが、小説は細部の生活感が繊細で、紅茶の扱いなどが素敵だった。果物とお茶の国なのだ。

ところで、表紙写真の天使像は



◆イラン北西部ケルマーンシャーの殉教劇用施設の装飾

ところでこの本を手にしたとき、私は表紙カバーの画像に魅入られてしばらくぼんやりしてしまった。

……おお、七色の虹の翼の天使だね。鳥は世界にさまざまに極彩色なのだから、こんな翼もあつていいわけだ。

日本に有翼天使は来なかった

ときに、この翼ある天使が中国や日本になると翼がも

げて、天衣を翻す飛天になる。法隆寺の壁画に翼のない飛天がとんでいる。古代の仏教遺跡ミーランに有名な「有翼天使像」壁画があるが、シルクロードを東進してタクラマカン砂漠まできた天使は、砂に埋もれて西域に留まり、「西の方陽関を出れば……(王維)」の陽関を越えなかつたらしい。敦煌遺跡もミーランも砂漠の東縁のオアシス都市だが、敦煌壁画になると翼のない飛天だ。

ミーランの天使はおもしろいヘアスタイルをしている。こういう前髪だけ残して剃り上げたモヒカン髪型は唐子みたいでもあるが、習俗史に詳しくないから、どのへんのものなのかわからない。ペルシア・ローマの方からやってきた壁画制作の職人が、注文に応じて在地の習俗を取り入れたが、顔立ちは描きなれたお国の風になったというところもありうる。

天使というのは文字通り「天の使い」だから、天上の神と人間との仲立ちをする神格だろう。それが鳥の翼をして空からやってくるのは分かりやすい形象だが、日本ではわざわざ人間に似た顔をした仲介者を登場させる手間はとらない。神意を告げるなら鳥そのもので十分だから



らだ。鳥居はそのよりましである。しかし鹿だったり蛇だったり、あちらこちらからお告げを聞いたのではまずい、真理は二元化されなければならぬ。ユダヤ教・キリスト教・イスラム教など、有翼天使は一神教の世界観に現れる形象らしい。

天から一直線の権威。

紀元前6世紀頃とか、世界最古の宗教のひとつゾロアスター教は、古代オリエント世界を統一したペルシア帝国の国教的な宗教らしいが、あのアフラ・マズダー神の守護霊はオオワシのような翼を持っている。砂漠と大蒼穹——古代に天体観測・天文学を発達させた風土だ。モンソーンアジアの密林では空が狭くて雨に閉ざされ、天使の翼もジャングルに引っかかっちゃいそいだ。

インド神話にはガルダという神鳥がいるけれど、あれは従順な神のお使いなんかにはなれない、独立自尊の暴れ者だ。ヒンズー



的な形象は古くから東南アジアを覆っていたわけか。日本に唯一有翼なのは鳥からす天狗だけれど、あれなどもガルダイメージの変形か。

それはともかく、この表紙写真を見たとき、イスラムは偶像崇拜を嫌うと聞いたが天使はOKなのか……？という初歩的な感想があつた。不可視であるアラーの神を形象化してはいけないのであつて、神を称える凶像はいいわけなのか。キャプションでは「イラン北西部ケルマーンシャーの殉教劇用施設の装飾」とあるから、民衆教化のためにはやはり華やかな絵柄は必要なのらしい。

どこまでがアジア

天使の大きな二重脛、しつかりした顔立ち。イラン北西部のケルマーンシャーといえ、ぎりぎりイラク寄りだし、天使の風貌もイラク人寄りだかクルド人系だか、私は知らない。イラン人はモンゴロイド「黄色人種」とコーカソイド「白色人種」が混じっているとされるが、イラクも同じか。そういう区別ってどことなく不愉快な感じがする。大昔から人間は移動して入り混じって暮らしてきたんだから、人種だの民族だの国境だの、差異を

言い立てることは、もう止めないかと言いたくなる。

ときに、サッカーのワールドカップのアジア予選を見ていると、え？ オマーンとかサウジアラビアとかいまだにギンギラした王様がいる中東の砂漠の国もアジアなのかと、毎回びっくりする。「アジア」という概念自体がヨーロッパから見た「あつちの方」的な辺境未開のイメージなのだろうから、仕方ない。

日本だつてヤマトタケルが足柄峠を越えて帰るときに「吾妻はや」と呼んだから足柄山より東を「あづま」ということになつたと『古事記』は言っている。本来東西なんて相対的なものなのだが、奈良盆地中央から見ると西南北、いつでもそれは権力と支配の問題だ。誰が何処において自分を世界の中心だと事挙げするか――。

で、調べちゃつた。トルコはアジアか？ FIFAサッカーではトルコはアジアでない。予選はヨーロッパ枠。国土の大半が「小アジア」と呼ばれる地勢でも、アラビア語でないからヨーロッパの範囲なのかね。

たぶん、ノアの箱舟が辿り着いたのがトルコのイラン国境に近いアララト山だから、キリスト教文化にとつて

は切り離せない国なんだろう。でも現在はイスラム教だから、これまた仲間というには抵抗ありということか、中世の十字軍遠征は聖地エルサレム奪還が目的でも落下傘でピンポイントに目的地に降り立つわけではなくてトルコ領内を蹴散らし略奪しながら進軍したわけだから、ヨーロッパ人にとつてイスラム・トルコというのは、感覚的に異世界であることから脱しきれないかもしれない。ブッシュは9・11の後、報復攻撃を始めるとき、十字軍だ！ と口走つた。ときに、トルコのEU加盟は決まつたんだろうか。

天使のアンクレット・ブレスレット

こんなことをくどくど書いてしまったのは、表紙の彼女の足飾りが気になつたからである。そうだよ、天使は腕輪も足輪もするよねえ、と思つたからである。仏像の菩薩さまだつて、天衣で隠れていることも多いがアンクレットは足釦そくざんといつて基本の装束である。

しかし思い出す。昔オードリー・ヘップバーンの映画『昼下がりの情事』で、主人公の若い娘が背伸びして「知つた大人の女のふりをして、恋人・憧れのおじさんグレゴリー・ペックにアン

クレットをたしなめられる場面があった。私は、ふーん、そうなのか。アंकレットっていけないお洒落なのか、と思ったものだ。そこで今ウイキペディア。

アंकレット＝足首に着用する装身具。起源は奴隷の足輪で、
“ 恋人(または夫)の所有物 ” である事を暗喩していた。

Wikiの解説は誰でも書きこめるものらしいが、文化は多様なのだから一つの解釈を「これ常識」などと言い張らないでほしいものだ。しかし少なくとも映画によればアメリカの「常識」ではあったわけである。足輪をしているから私をあなたの奴隷にしてね、だって？ 下世話な常識ね。それって、何百年も奴隷制度を強いてきた人たちの傲慢さや疚しさではないのか。いまだに植民地主義に発想を占拠されていやしませんかと、私は言いたいわけである。

それにしてもこの天使、足釦・腕釦わんせんのほかに手首にもなにか嵌めている、どうみても腕時計に見えるのだが？？ ところで、ヘルシア文学専攻・中村菜穂氏に調べてもらった。この劇場はいつの時代の建物か。

——そうしたらなんと、1901年の創立、近代のものだった。



さまざまの政治動乱で損傷を受け、1928年に改修工事。そもそも国内の民族対立を融和させるための文化施設だから、装飾もいろんな様式を取り混ぜているのかもしれない。1928年というのはレザー・シャーによる「近代化」政策時代なので、女性解放の動きも進んで、ヴェールの廃止は1936年だという。

よよ、天使の腕輪はもしかしてほんとに腕時計だったのか？ 壁面の天使像だから古いものだろうという思い込み。その極彩色に日光東照宮を連想したせいもあるが、日本でいえば江戸時代くらいの建造物かと思ったのだ。改装の壁画を任された20世紀のタイル職人は、伝統的な意匠に加えて、これからの女性はこうでなくちゃ！ と張り切って腕時計をさせたのだろうか。どこか可愛い。

いつでも思うのだが、ものを正確に見ることの難しさ、それをまたここで思った。世界は誤解や偏見で出来あがっていて、それに権力による情報操作、大衆の怠惰や独善が加わるから、ねじれは容易にほぐれない。

これが腕時計なのかは明確にはわからなかった。でも、イランの女性たちは逞しくなやかで強いことがわかった。彼女たちははねのけるだろう。ほら、写真の作家は腕時計をしている。